

二診合参のいろは

～腹診で臨床力UP～

鍼道五経会 代表

足立繁久

腹診と脈診の二診合参

- 四診合参 すなわち望診・聞診・問診・切診を駆使する
・ ・ ・ とはいいますが
- 四診について正しく理解できているだろうか？
- 鍼道五経会では（切診において）脈診・腹診の二診合参を勧めています。

各診法を正しく理解しよう！

四診を使いこなすということ

- 神・聖・工・巧

経言、**望**而知之、謂之**神**。

聞而知之、謂之**聖**。

問而知之、謂之**工**。

切而知之、謂之**巧**。

難經六十一難 より

望から始まり、聞き・問い、切（触れる）ことで知（診断）に至る

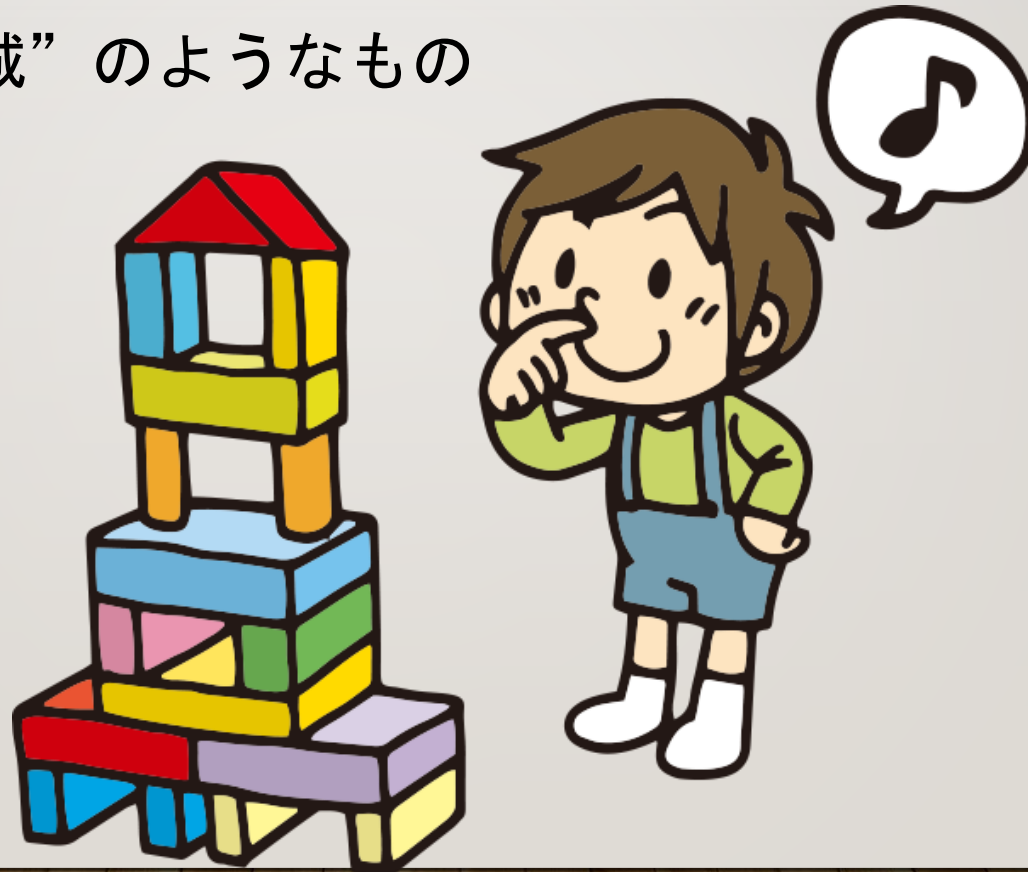
なぜ二診合参が必要なのか？

- 実際の病は、複層構造になっている。
- 各階層の異常を、視点を変え、観察・分析する必要がある
- 視点を変えるには、異なる診法を用いる必要がある

各診法への理解が必須！

階層の違い

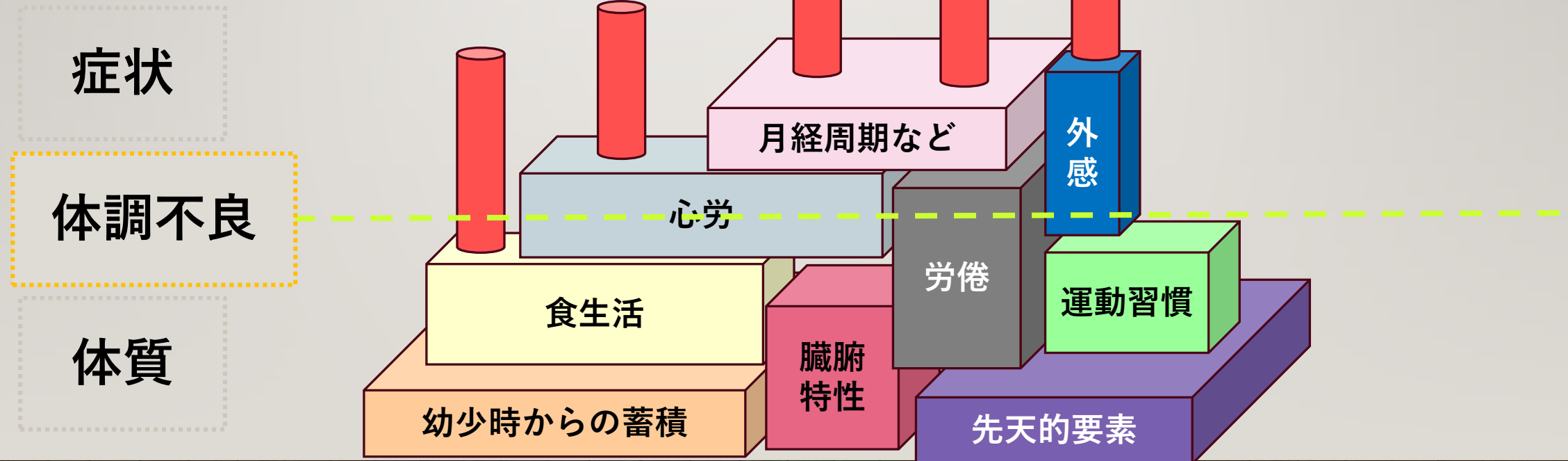
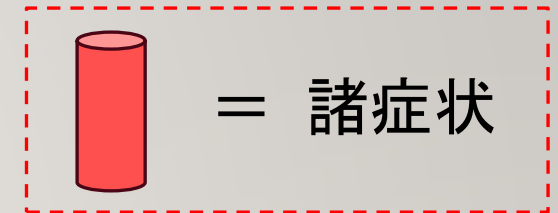
- 病気は“積み木の城”のようなもの



症状だけでなく、体質を含めてみると複数の階層から成る

治療すべき階層をみる

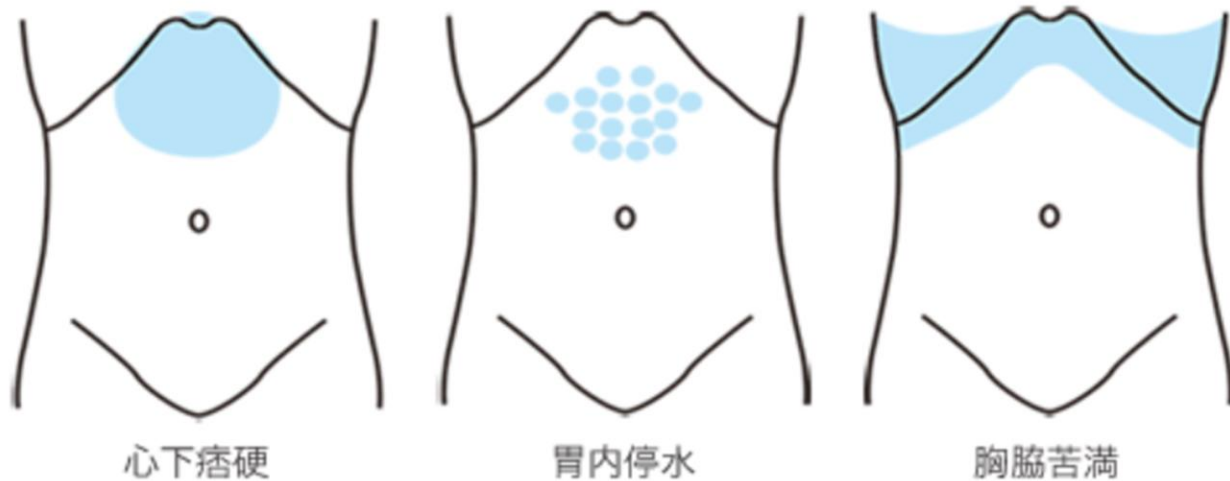
- ・ 症状と体質は同じ階層にあるとは限らない



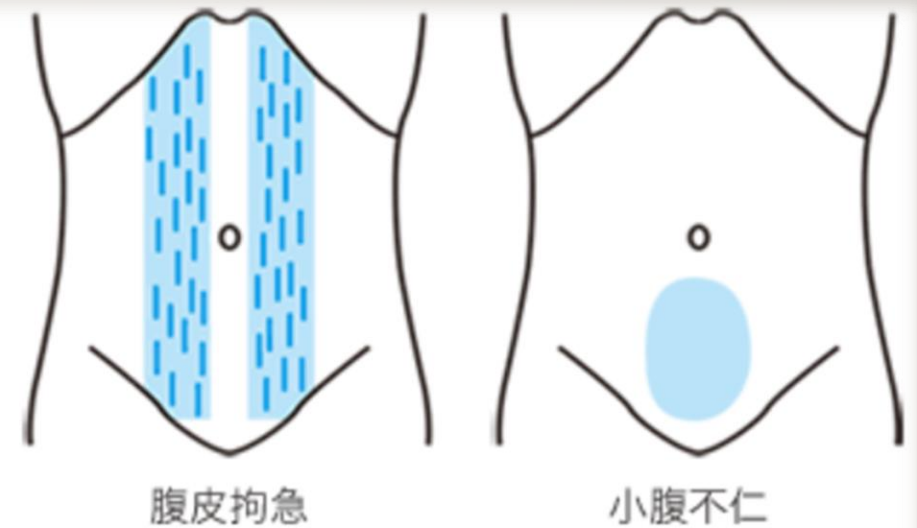
“症状”と“体質”は異なる階層にあることが多い

実際に腹診をどのように使うのか？

現代の日本漢方では…



腹診によって各所見を収集し、
各所見に相応する病態を整理している。



腹診と脈診の二診を比較

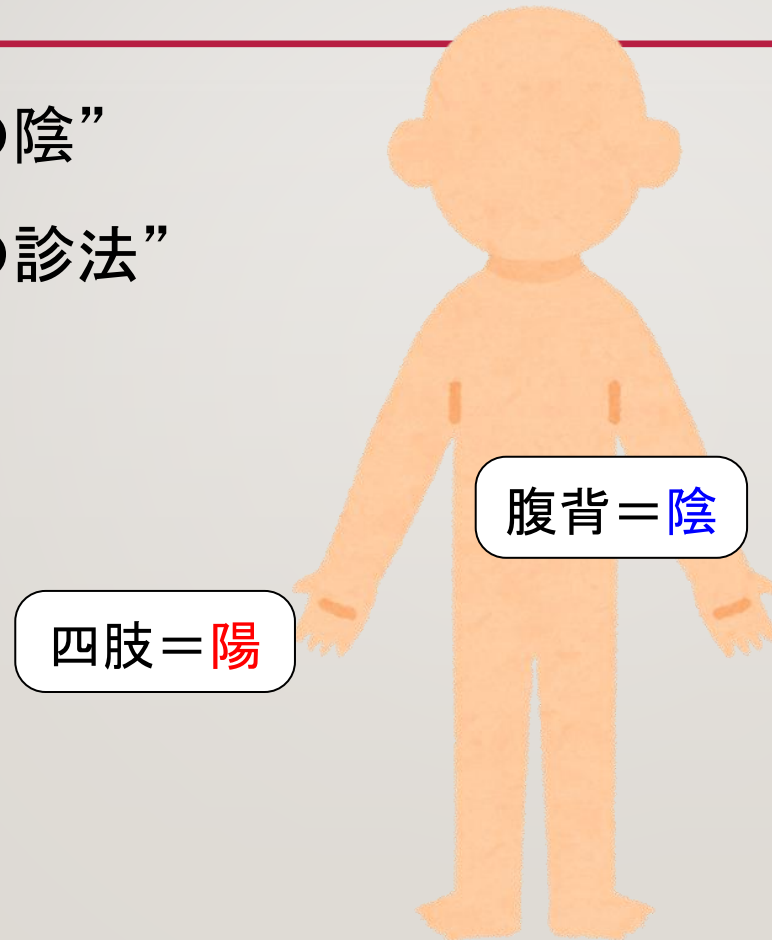
- 脈診と腹診、それぞれの特性とは？



脈診と腹診、それぞれ長所と短所を把握しよう

腹診について

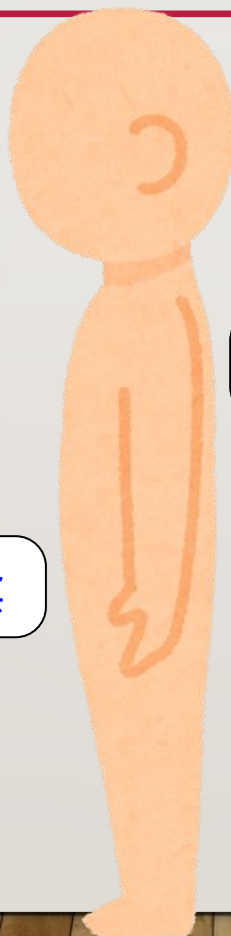
- 腹は“陰中の陰”
- 腹診は“陰の診法”



腹診の特性が分かる

腹という部位を理解する

- 腹は“陰中の陰”
- 腹診は“陰の診法”



腹部＝陰

背部＝陽

陰の診法ということは…？

腹診と脈診の二診を比較

- 脈診のよさ



部位

寸口脈でコンパクトな範囲で

情報

全身の情報を得ることができる

情報の質

病位・虚実・病邪…などの精密な情報が得られる

技術や情報の精密さ

腹診と脈診の二診を比較

- 腹診のよさ



部位

腹部（心下～小腹という範囲）

情報

身体の情報を得ることができる

情報の質

からだの虚実・病邪…などの
情報が得られる

腹部という対象範囲の広さ、指先ではなく手掌で診察可能。

最も信頼する中医診法は？

- 脈診・腹診・舌診…

など各種診法のなかで、どの診法に信を置く？

自分の診断スタイルを認識しよう。

腹診の大きな特徴

- 日本腹診書を代表する『診病奇咳』より

○胸腹は、五藏六府の宮城、一身資養の根本、陰陽氣血の發源、内傷外感の所由にして、古より數多の診法を設けたるも、此藏府を知るべきためなれば、胸腹を診するより甚親切なるはなし。（對時）

○外病は脈にて知、内病は腹にて知るといふこと、誠に然り。腹は病の本なれば、腹をこゝろみざる醫師は、自由成兼ねるものなり。乃至は、一年二年にも、腹の厚薄虚實によつて、たしかに知れるものなり（白竹）

臓腑の情報を得るのに適する診法

腹診の大きな特徴

「外病は脈にて知り、
内病は腹にて知るといふこと、誠に然り。」

『診病奇咳』より

『腹証奇覧』より
外病（外感病・表証）の方剤
桂枝湯・葛根湯証の図



鍼灸学校で教育される腹診のひとつ

- 難経腹診

五臓腹診
五行（五方）の配当

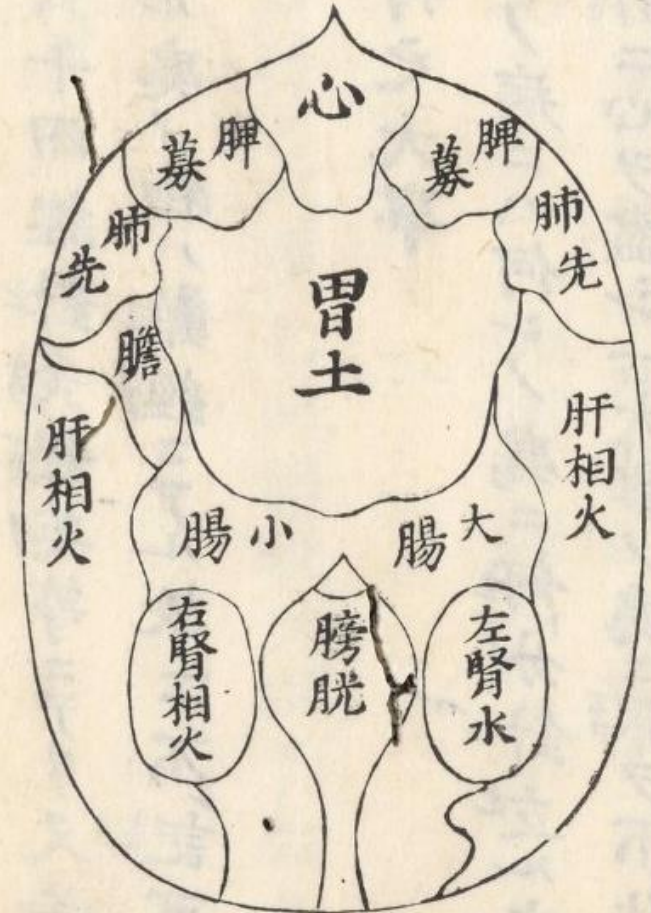


難経十六難より

日本で用いられる腹診のひとつ

- 打鍼術で知られる夢分流腹診

夢分流臓腑之圖



各臓腑が明確に配当されている

『鍼道秘訣集』 夢分流臓腑之圖
京都大学附属図書館より引用

みんなは腹診をどのように診ている？

寒熱？

虚実？

滑濇？



腹診のキホン

- 『一本堂行余医言』按腹（香川修庵 著）より

吾門以按腹為六診之要務。何則大槩按診腹部、可以辨人之強弱也。凡按之、腹皮厚、腹部廓大、柔而有力、上低下豐、臍凹入、任脉低兩旁高、無塊物、無動氣、此為無病之人、為強。在病人、亦有此數項、為易治。

凡按之、腹皮薄、腹部隘狹、無力、或堅硬、上高脹下低鬆、臍淺露、任脉高兩旁低、多塊物、有動氣、筋攣急、虛里動高、此為弱、為病人之腹。在病中、若有此數項、為難治。此其大畧也。

其餘有深微意味。但可以口傳、不可以書、示非敢秘也。

腹診のキホン

- 『一本堂行余医言』按腹（香川修庵 著）より

吾門、按腹を以て六診の要務と為す。何となれば則ち大概腹部を按診して、以て人の強弱を弁ずるべき也。凡そ之を按するに、腹皮厚、腹部廓大、柔而有力、上低下豊、臍凹入、任脈低両旁高、無塊物、無動氣、此れを無病の人と為し、強と為す。病人に在りても、亦た此の数項有れば、易治と為す。

凡そ之を按して、腹皮薄、腹部隘狭、無力、或いは堅硬、上高脹下低鬆、臍浅露、任脈高両旁低、多塊物、有動氣、筋攣急、虚里動高、此れを弱と為し、病人の腹と為す。病中に在りても、此の数項有るがごときは、難治と為す。此れ其の大略也。其の余に深微の意味有り。但だ口を以て伝うべし、書を以て示すべからず。敢えて秘するに非ざる也。

『一本堂行余医言』に記される腹診の要点

- 腹診の八項目

腹皮

腹形

腹力

上下

…腹部の上部・下部のバランス

臍

任脈と両傍

両傍…陽明胃経

塊

動氣

『一本堂行余医言』に記される腹診の要点

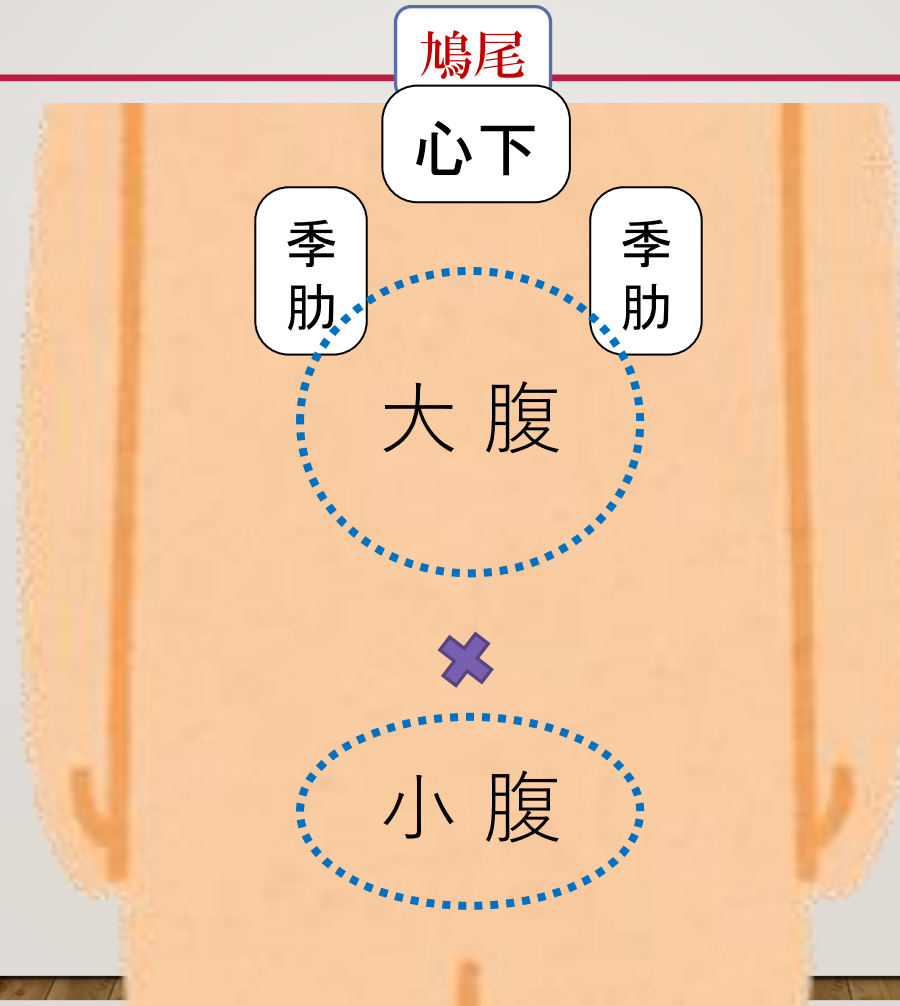
- 腹診の八項目

「虚実」「寒熱」だけではない、
様々な情報を腹診から得ていることが分かる

とくに「腹力」「臍」「動氣」＋呼吸
という項目は、見落とされがちな情報ではないだろうか？

腹診における部位名称

- 一般的な腹診

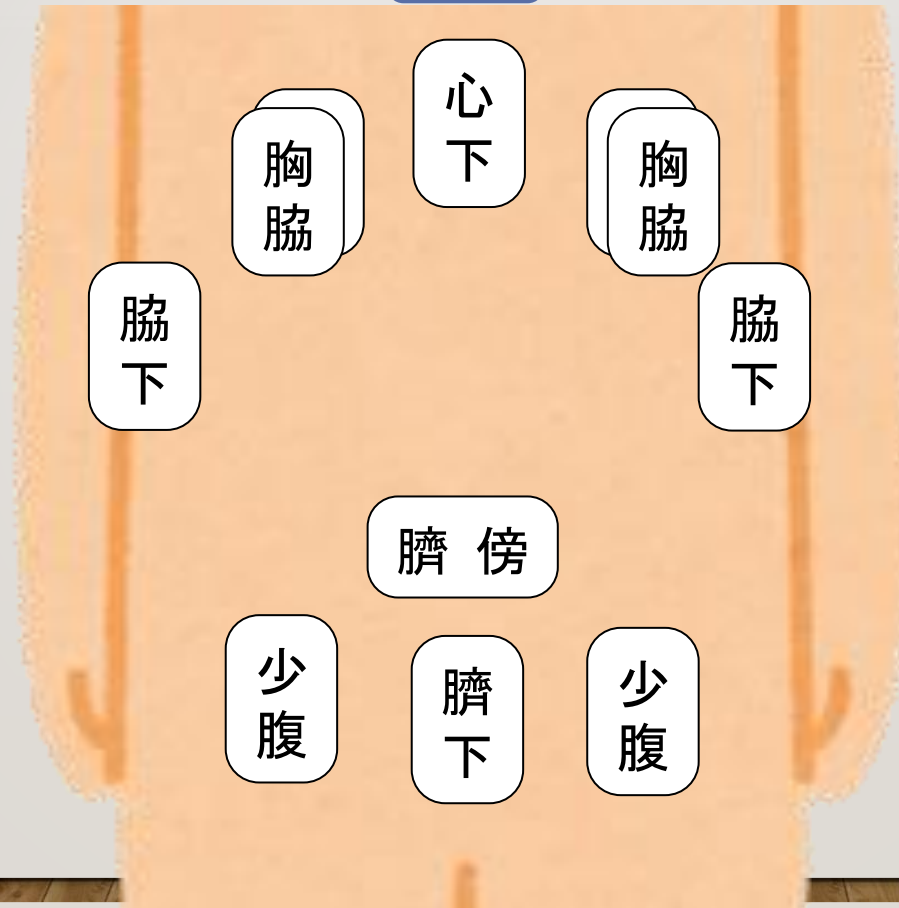


臍を中心に分ける

腹診でみる部位

鳩尾

- 一般的な腹診



『診病奇佞』より引用

診候部位の名称

実際にお腹を診てみよう



『按腹図解』 安神の術より引用